

新聞記者が 危ない

内そとからの砲火

大谷昭宏

元・読売新聞大阪本社
社会部記者

朝日ソノタマ

大谷昭宏（おおたに・あきひろ）

1945 年，東京生まれ。1968 年，早稲田大学政治経済学部卒，同時に読売新聞大阪本社に入社，徳島支局勤務。

1970 年，大阪本社社会部で警察（サツ）まわりをしたあと，1972 年から大阪府警捜査一課担当の事件記者，1977 年社会部遊軍。1980 年から当時社会部長だった黒田清氏とともに大阪読売の人気コラム「窓」欄を担当。

1987 年 1 月，読売新聞を退社。現在フリージャーナリストして原稿執筆や講演活動をする一方，黒田氏と「窓友会」を設立，ミニコミ紙「窓友新聞」を発行している。

主な著書（共著を含む）に，
〈窓シリーズ〉・「大きい車どけてちょうだい」など 5 巻（角川文庫）。
「OL殺人事件」（同），「三菱銀行の 42 時間」（同），「誘拐報道」（新潮社），「開け心が窓ならば」（解放出版社），〈新聞記者が語り継ぐ戦争シリーズ〉・「中国孤児」（角川文庫）などがある。

新聞記者が危ない

——内そとからの砲火——

定価 1200 円

昭和 62 年 8 月 31 日 初版発行

著 者 大谷 昭宏 © 1987

発行人 喜久村 繁

印 刷 図書印刷株式会社

製 本 図書印刷株式会社

発行所 株式会社 朝日ソノラマ

〒104 東京都中央区銀座 4-2-6

第二朝日ビル

電話 03(563)6021~3 振替 東京 2-40311

落丁本・乱丁本はおとりかえます。

ISBN4-257-03234-0

内そこからの砲火

新聞記者が危ない

大谷昭宏

元・読売新聞大阪本社 社会部記者

朝日ソノラマ

新聞記者が危ない——目次

プロローグ 記者に向けられた銃口……………9

第一章 支局は開かれているか？……………29

新聞をささえる支局記者／徳島入りのビザ／酒とチクワで単独記者会
見／大人と子供の戦い／目を覆いたくなった県版

第二章 町の息づかいが聞こえてくる紙面……………63

新人教育はこれでもいいのか／釜ヶ崎、泣きたくなるほど好きな町／こ
わいものだらけの人たち／ウソ記事か、なくてもいい記事ばかり／工
場潜入ルポ／みごとにそろった「誤報の言いわけ」

第三章 犬も歩けばニュースに当たる……………103

動物園の中の記者クラブ／ボクはボケの飼育係／怒り心頭の社会部長
／鳩騒動で運命の出会い／園長との対決／新聞記者はデスクを選べ

第四章 事件記者よ熱く生きろ……………131

冬の夜の激励会／本日も何もなし／敵のレーダーを破壊せよ／プラチ
ナカード／焼き鳥屋でのひと言／とんでもない若殿様／減点主義が記
者をダメにする／背中に無念と悲しみを負って

第五章

記者たちと戦争……………

177

せっちゃんの帰国歓迎会／氷点下二十度に響きわたった歓声／素子への手紙／「黒田軍団」の芽ばえ

第六章

流れに抗して……………

203

集中砲火第一弾／吐き捨てるような口ぶり／正体を見せず、ただ無言／見世物としての戦争展／悲痛なニュース／巡査の両親の涙／北風に送られて去った男／仕事は奪うもの／記者は所詮サラリーマンか／論説委員長の大演説

第七章

「窓」にさす光……………

259

心のキャッチボール／「飲み屋のママがんに死す」・「何も欲しくない何もしたくない カモウ岬の沖にゆきたし」・「親父をとるかB子をとるか」・「一人で借りた小さなアパート」・「そんなにかわいく笑わないで」／ほくらだけの窓を開こう

エピローグ 牙をむけ、自由を侵すものに……………

281

装幀／木幡朋介

新聞記者が危ない

プロローグ

記者に向けられた銃口

昭和六十二年五月三日、憲法記念日の午後九時すぎ、自宅でワープロに向かっていた私に一本の電話がかかってきた。

電話をかけてくれたのは、ついその数カ月前まで、読売新聞大阪本社で、私の上司であった黒田清さんであった。

電話の声は少しうわずっていたが、それを押さえるように、そして大事なことは言い漏らさないように、あらかじめ少し頭の中で言うべきことを整理したような言葉遣いだった。何か大きな事件が起きた時の社会部長時代の黒田さんの癖である。

「大谷君か、朝日新聞の阪神支局が襲われて、記者が二人、銃で撃たれたの知ってるか」

「えっ、さっきテレビのニュースの最後にぎりぎり、西宮市内で朝日の記者二人が撃たれたというのが流れてましたが、そのあと、どこのチャンネルを回しても続報がないので、そのままにしていたんです。あれ支局が襲われたんですか。それはえらいことですわ」

言いながら、私は少し自分の手が震えてくるのがわかった。電話の横で妻が不安そうに、それについて私と黒田さんのやりとりを一言も聞き漏らすまいと、耳をすましているのがわかった。これも私にとっては、いまやなつかしい光景だった。私が事件記者時代、いやそれから内勤の遊軍記者になつてからも事件が起きて、府警本部の泊まりの記者や、あるいは本社の当直から呼び出しの電話があるたびに彼女はいつもそうしていたのだった。

黒田さんは受話器の向こうで、なにか書類かメモのようなものをガサゴソと動かしながら続け

た。

「そうやねん、大谷君これはえらいことや。たったいま朝日新聞の東京本社 of 社会部の記者から電話があつて、自分のところの阪神支局に今夜、獵銃を持った男が押し入つて、記者が二人撃たれた。その事件についてよくにコメントがほしいと言つてきたんや。そやけどそれだけの内容でコメントせえ言われても、こっちは何ともしやべりようがない言うたら、ほんまに二、三枚ほどのペラやけど、一報を読んでくれたんや。なんでも覆面した男がいきなり押し入つて来て、記者めがけて、獵銃を二発発射、それぞれ支局にいた二人の記者に命中してかなりの大けがらしいんや。それにしても大変な事件が起きたもんや。それでキミ、たしかあしたの朝、ラジオ大阪の番組もつとつたなあ。どうせこの話になるやろ思つて、知らせておいたらないかん思つたんや」

ハイ、すみませんと答えながら私は黒田さんが、その朝日の記者にどういふコメントをしたかは聞こうとしなかつた。声の調子からして、腹わたが煮えくり返るほど怒っていることがわかつたからだ。そして翌朝、朝日の紙面で見た黒田さんの談話は、私が想像したもの、ほとんど変わりがなかつた。

「それじゃ一応、いまのところはそういうことで……」と言つて黒田さんは電話を切つた。それと同時に私と妻はすぐにテレビに飛びついて、かたっぱしからチャンネルを回してみたが、どこの局も休日の外国映画や歌謡番組が画面に出てくるばかりで、いらだたしい時が小一時間も続いた。やつとNHKが現場からの映像を流したが、それも黒田さんが読んだ朝日の一報とたいして変わら

ず、事件の概要は一向につかめなかった。

ついに私は、翌朝五時半起床ということも考えて、テレビの前を離れて床にはいったのであった。

そして四時間あまりの睡眠の後に手にした朝刊の各紙は、小尻知博記者(29)の死と犬飼兵衛記者(42)が重傷を負ったことを報じていた。

ラジオ局へ向かう車の中で朝六時のニュースがあった。広島県川尻町の小尻記者の実家を両親、それに二歳になる美樹ちゃんとともにタクシーで出発した奥さんの裕子さん(27)は午前三時すぎ、病院に到着、そこで初めて若き夫の死を知ったことを淡々と伝えていた。

そのニュースを聞きながら私は、涙がとめどもなく溢れてくるのをどうしようもなかった。いつも迎えに来てくれる個人タクシーのおじさんに、そのようすを見られまいと、バックミラーの死角に体を移し、ハンカチで涙をぬぐった。こんな状態で、果たして番組で、この事件について話せるのだろうか。そんな私の不安にはおかないく、涙は局に着くまでついに止まらなかった。

番組を終え、梅田の地下街で朝のコーヒーを飲みながら、朝刊各紙にあらためて目を通し、そこで私はいままなお心の中を流れている涙について考えてみた。

話は前後するが、読売新聞大阪本社社の記者であった私は、元社会部長であった黒田さんとともに、この年の一月十日、社を辞めた。私は十八年九カ月の新聞記者生活であった。だから小尻記者は社こそ違うが、私にとって後輩の記者であり、そして犬飼記者は私より一つ年上であった。

その二人が凶弾に倒れたことに、なぜ私の心はこれほど揺れ、そしていつまでも胸の中を涙が流れるのだろうか。自分が記者という職業を捨てたことへの愛惜なのか。それは違うはずである。なぜならば私は読売という組織こそ離れたけれど、自分の中では新聞記者であることは少しも変わっていないと思っているからだ。

では志半ばにして、二十九歳という若さで倒れた小尻記者の悔やしさを思つての涙だろうか。それも確かにある。しかしそればかりではないはずである。言葉は適切ではないかもしれないけれど、はつきり言つてその程度の涙なら、このショッキングな事件に触れた市民の何人かは、流してくれるに違いない。では何なのか……。

私の中でそのことは、胃に残った未消化な食物のようになっていった。そしてそれは数日たつてもなくなるどころか、ますます重たい固まりのようになっていったのである。その一方で私の心の中では、新聞で見たネクタイを少しゆるめて、何かはにかんだように笑みをもらしている小尻記者の顔が、浮かんでは消えるのであった。

その笑みとは裏腹に、私の心の中に居座り続ける^{おぼろ}濁のようなものは一向に消えない。特にこの事件を報道する新聞各社の紙面を見るたびに、固まりどころか、沈澱物になって行くのであった。

読売、サンケイ、毎日といった他社はもちろん、当の被害者ともいふべき朝日新聞を見ても、私は、一体全体この報道姿勢はなんなのだと、うすら寒くなる思いにかられたのである。

たしかに各社の紙面はかなりのスペースをさき、学者の見解や、市民団体のアピールを掲載して

はいる。だがそこに憤怒の思いに顔をまっ赤にし、怒りで手を震わせ、そして拳を握りしめて、全身で相手にぶちあたって行くという記者の姿勢が感じられないのだ。

この銃弾は朝日新聞、あるいはいまの新聞各社に向けて放たれたものであるに違いない。言い換えれば自分たちの身にふりかかったことなのである。それなのになぜこのような時にまで、学者の言葉を借りて自らの正当性を主張しなければならないのか。市民団体のお墨つきをもらって、ホラ、見て下さい、この人たちもこんなに私たちを支持してくれているんですよ、といった安物の政治家みたいなことをしなければならぬのだろうか。

ことここに至って、鈍感な私もようやく気がついた。あの朝から私の心の中を流れ続けた涙はなんだったのか。そして何日も私の胸の中にドスンと入り込んでいたものはなんだったのか。

それはまぎれもなく、

『記者を撃った』

という事実だけが私には絶対に許せなかったのである。それなのに一体この報道の姿勢はなんだ。新聞各社はこの事態にこんな情けない紙面しか作れないのか、という怒りが目を追って私の胸の中で、ふくらみ続けていたのである。

こう書けば、記者だけが特別なのか、その言い方こそが記者の驕りではないのかという反論は、当然のように出て来るに違いない。だが私は、

『記者を撃った』

そのことがあくまで許せないのである。

ならば、いまこの原稿を書いている時点で犯人はなぜ小尻記者たちを襲ったのか、動機さえわかっていないではないか、あるいは記者の個人的トラブルが原因かも知れないではないかという理屈も出てくるだろう。現実には私は事件発生からしばらくの間、当の朝日新聞さえ、かくもへつぱり腰な紙面を作った裏には、そんな慮り^{おもんばか}があつたのではないかという気がしてならなかったのである。もしそれが朝日記者の単なるけんかの結果であつたとしたら恰好がつかない。本来、朝日新聞が謝るべきところを、謝罪の仕方が悪かつたというようなことから、この事件が発生してしまつてあとで赤恥をかくことになりはしないか、朝日新聞はひよつとしてそんなことを考えていたのではないだろうか。この想像が間違えてないとしたら、私は全身が萎えるほどがっかりする。

私が新聞記者をしていた十八年九カ月の間、時々、「言論の自由とは何か」といったことを真正面から聞かれたことがある。

そんな時、私は決まつて、

「キミの言っていることは百パーセント間違えている。しかしキミがそのことを言う自由は百パーセント保証する」

それが言論の自由であると私は思っている、と答えた。その思いはいまも変わらない。それからすると今度の朝日事件について私は、